

## 研究室開放でふれた女子大生の姿

植 田 ひ と み

はじめに

「日々、楽しく暮らしたい。」職場といえど、暮らしの場。楽しくなくては、意欲が湧かない。力が出ない。それでは仕事はしても、自分を尽くせない。大学勤めの楽しさは、何より学生とのつながり。日々、学生と、共に暮らしたい。その暮らしを充実させたい。研究室を拠点にしよう。元気の出る場にしよう。そう願って、勤め始めより、研究室を開放する。出入り自由。ゆったり8人はかけられる大机を置く。私の机以外は使用自由。飲物はセルフサービスで。有り難いことに、ゼミの学生中心にさまざまな学生が足を運んでくれる。時に他教員も加わって。大家族の居間を感じたりもする。うれしい。この研究室の暮らしのなかに、予想をはるかに越える収穫をみる。以下、女子大生の実態の一端を紹介したい。

### 1 出会い支え合い

#### (1) 聞いて、聞いて！

「先生、遊びに来てやったよー。」廊下に響きわたる威勢のいい声。三人の来訪者。前の教室では授業をしているのに。ハラハラしつつも、ニコリ「いらっしゃい！」私の授業で知り合った人たち。手には好物のチョコ菓子里にポテトチップス。「今、授業は？」「休講。イエーイ！」とVサイン。「コーヒーもらうね。先生は何がいい？コーヒーでいいよね。」「ありがとう。」「先生もこっちに来て。離れとっちゃいけんよ。」事務机から大机の輪に入る。しばし、話に花が咲く。大学のこと、生活のこと、ボーイフレンドのこと、アルバイトのこと、芸能・ファッション情報等々。ムカツク話あり、ときめく話あり。途切れることはない。三人とも、実に生き生きしている。その生き生きを見ているだけで、うれしくなる。そのうち、廊下で学生のざわめき。「おっと、バイト、バイト。」「わたしも。」手際よく片付ける。「先生、また来るね。」「これ（お菓子）、残りあげる。バイバイ。」楽しい一時である。どこかで三人だけで話すのと、聞いている私がいるのと、彼女達には違いがあるようだ。役立ってるなら、うれしい。こちらも若者文化にふれるチャンス。

「聞いて」の思いに駆られている人は、寮にもいる。「先生の研究室の明かりが見えたから」と、8時を過ぎて、勢いよく飛び込んで来る。「仕事しながらでもいい？」と聞くと、「はい、いいです。別に特別な話があるわけじゃないから。」と言いながら、とうとう門限までとりとめなく話して帰

る。「おやすみなさい！」が軽やかに感じられ、こちらも顔がほころぶ。

## (2) 先輩と後輩の間で

「私のことを聞いて！」「私の考えてることを聞いて！」と胸に思い一杯でやって来る人もいる。そういう場合こそ、研究室にたむろしている人たちが随分お役に立ってくれる。むろん、分け有りの来訪者があると、「じゃ私たち失礼します。」と心遣いをみせてくれる。その時、むろん相手しだいが、「先輩に聞いてもらうのはどう？」と尋ねてみる。たいていの場合、即「はい、いいです。居て下さい。」と返ってくる。「よかったら聞いてあげて」と声をかけると、快く引き受けてくれる。中には、「30分位しかだめなんだけど」とすまなさそうに言いながら、途中で出られなくなり、予定変更で最後まで付き合ってくれる先輩もいる。例の大机を囲み、先輩が入れてくれた紅茶を飲みながら、じっくり、しっかり聞かせてもらう。みんなで、うなづいたり、質問したり、時に感嘆の声をあげたりしながら。来訪者は、内にたまった思いを、一生懸命に語る。先輩たちもそれぞれの思いを語る。語るうちに、話はあれへこれへと、どんどん広がっていく。先輩たちにとっても、身に覚えのあることも。いつしか、みんな自分のことのように力がこもる。「先輩、また聞いてください。話しにきます。」帰り際、来訪者の口をついて出たはずんだことばに、聞いてもらえた満足感と、一緒に考えてもらえたうれしさが、十分に感じられる。私一人では、ここまで満足してもらえないだろう。先輩達も、後輩のその言葉・表情に、自己の価値を確認できるだろう。

こういった来訪者がある時に、研究室に先に居る方が下級生のこともある。その場合も、お互いが了承するなら、同じように聞いてもらう。下級生は時には不躰な質問もする。しかし、それに一生懸命応えているうちに、来訪者が自分を整理できることもある。何より「先輩ってすごい。こんなことまで考えてるんですね。」と、後輩から驚きと羨望の眼差しでみられることで、大いに力づけられる。後輩の話を聞く先輩の対応にも、先輩の話を聞く後輩の対応にも、私自身、学びが一杯ある。

ところで、せっかく研究室にすばらしいアドバイザーがいても、「いや、ちょっと」と言われたら、私一人で聞くことになる。一人で受けとめるには、ゆとりがいる。時間的にも、精神的にも、肉体的にも。満足するまで聞いてあげたいと思うが、そうもいかない。すっきりした顔で帰っていく時はこちらもうれしいが、不燃焼のようすだと心が残る。たいてい「明日の放課後も来ていいですか。」と尋ねられる。そういう時に限って予定が入っていることが多い。しかも続いて。「ごめんね。時間ができたら電話するね。」と言うと、慌てて「いいんです。お忙しいのにすみませんでした。」と固い響きの言葉が返ってくることがある。仕事上、何を優先すればいいか、迷うところである。

「あの、ちょっといいですか？お忙しかったらいいんです。またにしますから。」と、まことに遠慮がちにやって来る人もいる。こういう人は「あの、～のことなんですけど…」とは言って

も、その後、なかなか言葉が出にくいことが多い。私と二人なら、緊張感からさらに言葉が出にくいだろう。こういう時も先輩が居てくれると大助かりである。来訪者の言いたいこと、聞きたいことが、先輩の口からポンポン出てくる。「ハイ、そうなんです。そこなんです。迷ってるのは。」緊張してうつ向き加減だった来訪者の顔に笑みが浮かぶ。ああ、よかった。私は聞いているだけでいいようである。

さらに加えると、来訪者の中には誰かにくっついて来る者もいる。たいてい、ほとんど話さない。しかし前述のような場に居ると、自分は何も話さなくても、たくさんの収穫がある。それを実感するからだろう。帰る時には、「また来ていいですか。」と尋ね、また誰かにくっついてやって来る。大歓迎である。

### (3) おおらかさと寛大さと

さまざまな学生がさまざまな思いをもって、研究室を訪れてくれる。そこで特に感じるのは、彼女たちのおおらかさと寛大さである。「動かない人だな。お茶はいつも入れてもらうばかりで、片付けもしないし。」「机を一人であんなに占領して。」「みんなが勉強してるのにあんなにはしゃいで」など、そうはしたくないと思いつつも、とかく非難の目で見てしまう私。それに対して、「いいんですよ。私こういうこと（お茶の世話）好きだから」「今は大丈夫だから。邪魔になったら除けてもらいます。」「彼女、すごいうれしかったんですよ。」と。「なんておおらか、なんて寛大なんだろう。」と感じ入ってしまう。

さて、千客万来はうれしいことだが、一つ注意がいる。「話（場）を切り上げる」ことができない人がいることだ。「帰りたくない」と口にする人も。一面、うれしいことではある。しかし、何事もズルズルしていると、マイナス面が出てくる。ここでも、その場を離れ難い人に対して、寛大さが顔を出す。「今日はここまでにしよう。」となかなか声がかからない。「ああ、よかった。」と思えるところで、切り上げる。こうすることで「またあした」、あるいは次への期待へつながると思う。この切り上げるタイミング、今の所、ここが私の出番となっている。

## 2 「自分が出せない」嘆き

学生同士の話のなかで、「言えんよね。」「そうよね。」「言いたいよね。」「なんて言えんのかね?」「嫌じゃー!」といった会話をよく耳にする。「自分が出せてない」「自分じゃない」「自分がない」「自分らしく生きたい」が、話題に上り、盛り上がる。何人もの学生がその類のテーマで卒業論文を書く。「自分が出せない」という嘆きが、今日も聞こえてくる。

### (1) 親との関係で

親に対する思いと自分の生き方について、切々と訴えるAさんの例を紹介したい。

大学生になり、親元を離れ暮らすようになったAさんは、いつの頃からか息苦しさを感じるようになった。人間関係が苦痛に感じられるようになった。なぜなら、Aさんは他人の前でありのままの自分を表現することができないからである。そのため後悔することばかりで、生きる楽しみが感じられなくなったという。

Aさんが自己表現できなくなったのは、今に始まったことではなく、幼い頃から自己表現が苦手であった。それは幼い頃のAさんを取り巻く環境と深く関わっているという。

Aさんの親は教師である。長女ということもあって、幼い頃から両親の期待を一身に受けてきた。Aさんを取り巻く周りの人たちによって、良い成績をとるのが当たり前、何でも万能、とにかく優等生というレッテルが貼られてきた。ただ「先生の娘」であったがために。何でもできて当たり前というプレッシャーを感じながらも、親の言うとおりに、親の期待に応えながら生きることが一番いいことだと思っていた。自分がしたいことがあっても勇気がなくて、結局は親の言うことに従わざるを得なかった。親の期待どおりにいかないこともあった。そんな時は、自分の能力不足であるのに、親のせいにしてしまっていた。自分の思うように生きていけない自分と、親の期待に応えられない自分がいて葛藤し、息苦しさを感じていた。

幼い頃からAさんを取り巻いていた環境は、現在の彼女に大きな影響を及ぼしている。親子関係だけでなく、友人関係、ありとあらゆる関係において、Aさんは他人に批判されたり、嫌われるのを恐れるあまり、他人に合わせて生きてきた。たとえ自分がしたいことがあってもできなかった。そこには「自分らしさ（主体性）」は存在しなかったと言う。

そんな調子で生きてきて、やっと今、自分自身の人生を自分の足で歩んでいないことに気付いたのである。時折Aさんを襲うなんとも言えない満たされない気持ちは、自分らしく生きることができていないからだとわかった。だからAさんは自分自身の一度しかない人生を充実したものにしたと思い、「自分らしく生きる」について、真剣に考えだした。

それから、私と二人で、友達を交えて、あるいは友達だけとの話し合いを重ねた後、彼女は次のように綴っている。

自分を振り返ることで、私の自己表現を妨げているものや感じさせている要因が見えてきた。私自身のことを決めるとき、いつも親が口をはさむのである。今まで、高校、大学と二度進路決定の機会があったわけだが、私の意志で選んだ学校ではなく、親が決めた学校である。親の言う通りに進むのがいいのだと思う私と、親の言う通りに進んでそれで私らしい生き方ができるのかと考える私がいた。結局親の言うとおりに進むのが親孝行にもなると考えた私は、親の言うままにきたのだが、自分自身で選んだ道ではないので後悔することが多く、こうなったのは親のせいだなどと考えている自分がいた。心の中で反発しながらも、親には逆らえなかったのである。世の中で何より自分が恐れているもの、私を縛っているものは親の存在 - 実際は私の中での親像 - なのである。縛られていると感じるということは、私は親に依存していて自立できていないということである。

親と自分は血がつながっているとはいえ、別々の存在である。考えも一緒であるはずがない。それなのに親の言うことに反発を感じながらも、私は結局従っている。なぜ、自分の意見を親に言うことができないのか。それはその意見を言うことで親と衝突、対立するのが怖いからである。親の言うとおりに生きていかないと、自分勝手に親不孝だと思ってしまうからである。私を息苦しくさせていたものは、幼い頃の親の権力行使によるもの、それによって私の中で作り上げられてきた親像であることがわかった。

幼い頃親の言うことを聞かないと叩かれたり、家に入れてもらえなかったりした記憶がある。逆に良い成績を取ったりした時は、欲しい物を買ってもらうことができた。この繰り返しによって、親に逆らうと怒られる、自分が傷つくのは嫌だと思うようになり、親の言うことを聞くようにしつけられてきたことが考えられる。

親が子どもに対して権力をもてるのは、子どもが依存している間だけである。親元を離れて暮らしているのに、親と自分のことを切り離せない、自分は自由でないと考える原因の一つは、経済的に親に頼ってしまっているからである。だから親の前ではありのままの自分でいられないのである。

Aさんは、自分を苦しめる最大の要因として、「親像」をあげた。幼い頃より親の在りようを見て、自分で作り上げた「親像」である。彼女は、ついにその親像との対決（本人の表現）を試みる。

思いきって実家に帰った。親に会えると言うのに、安心どころか恐怖を感じる程であった。私にとって親の存在はそれほど大きいのである。今まで自分の意見を言えば、怒られるかもしれないと恐れていた。しかし、父親に会い、「よく帰ってきたな。元気だったか。」と声をかけられるなり、涙があふれた。私は今まで苦しんできたことを父に告げた。…………… 父は驚いていた。…………… 私は今まで親に対し、自己表現をせず、自分の本当の気持ちを抑圧していた。そのために自分の中で、勝手に親像を作りだし、親の権威なるものにおびえ、親を嫌ってしまっていたのである。ところが実際に親が私に対して考えていたことは、逆のことだった。今までさんざん苦しんでいた自分は何だったのだろうと思った。自分の気持ちを自分で押さえつけて生きてきた今までをすごく後悔した。自分の中での思い込みにより、親を嫌っていた自分が許せなくて、親に対して申し訳ない気持ちで一杯になった。

「よかったね、Aさん。」私自身もなんだかホッとする。しかしその一方で、Aさんの言う「長い間の私の苦しみはなんだったのか」の言葉が重い。Aさんだけでなく、卒業後の進路、恋愛・結婚など、まさに人生の重大事にあっても、「親がどう思っているか分かるから、自分の気持ちは言えない」と沈んでいる学生の声が聞こえる。もどかしさと苛立ちを感じながら、私にできることを考える。

## (2) 友人との関係で

やはり自分の思いが言えないという悩みから、友人に対してどれくらい意志表示ができるかにつ

いて、卒業論文で取り組んだ人もいる。本学の学生305名を対象にした調査（中山，1995）を紹介して、実態を探りたい。調査は、授業場面、クラス活動場面、日常生活場面の三つから行われているが、ここでは日常生活場面にしぼり、なかでも自分の思いを言いにくいと感じている場面を取り上げる。

（Q1）「友人との関係がギクシャクしてしまうくらいなら、自分の考えは言わないほうがいい」と思いますか。

「とてもそう思う」（8.5%）      「どちらかと言えばそう思う」（38.3%）

「ほとんどそう思わない」（17.4%）      「どちらかと言えばそう思わない」（35.1%）

友人との関係がたとえギクシャクしても自分の考えを言いたいと思っている人が、2割に満たない。この結果に表されていることが、個々の場面でも読み取れる。

（Q2）夜疲れていて早く寝ようとした時、仲の良い友達から電話がありました。別に用があるわけでもなく、その友達は世間話を始めます。このような場合、友達に「疲れているから悪いけど切るね」といえますか。

「たいてい言えない」（32.8%）      「どちらかと言えば言えない方が多い」（40.4%）

「たいてい言える」（9.8%）      「どちらかと言えば言える方が多い」（17.0%）

（Q3）「今日の授業が終わったら、早く家に帰って部屋を掃除したり、ノートを整理したり……」と、放課後の計画を立てていたあなたに、仲の良い友達が「今日ショッピングに付き合ってくれる？」と誘ってきました。このような場合あなたは断れますか。

「たいてい断れない」（18.0%）      「どちらかと言えば断れない方が多い」（35.4%）

「たいてい断れる」（17.4%）      「どちらかと言えば断れる方が多い」（28.9%）

（Q4）仲の良い友達と二人で、本通りへ遊びに行くことになりました。友達は「靴を買って、あと本屋にも行って……」とその日のスケジュールを、すでに一人で決めていました。このような場合、ゆっくりと映画を観たかったあなたは、その気持ちを友達に言えますか。

「たいてい言えない」（10.5%）      「どちらかと言えば言えない方が多い」（30.2%）

「たいてい言える」（25.9%）      「どちらかと言えば言える方が多い」（32.7%）

（Q5）ゼミの部屋で一人で勉強している時、ゼミの仲間が数人入って来ました。その仲間が雑談するので、勉強に身が入りません。このような場合、「悪いけど、静かにしてくれる。」とみんなに言えますか。

「たいてい言えない」（31.1%）      「どちらかと言えば言えない方が多い」（51.5%）

「たいてい言える」（4.3%）      「どちらかと言えば言える方が多い」（13.1%）

（Q2）～（Q4）は仲の良い友達一人に対してであり、（Q5）は複数の友達に対しての場面である。特に目を引くのが、（Q2）と（Q5）である。誰も断ることは気が重い。（Q2）には、それが如実に表れている。仲が良いから言えるのではなく、仲が良い（と思っている）からこそ言えない関係

が見えてくる。さらに、(Q2)と(Q5)に共通して見られるのは、相手の言動を遮るような発言は極めてできにくいということである。(Q5)の回答の中には、「自分が他の部屋へ移る」というものがみられた。これも一つの解決法ではある。しかしギクシャクするくらいなら自分が引くわ、も感じられる。たとえギクシャクしても、自分の気持ちは率直に伝えたいと思う。相手に伝えること、それが、人と関係をつくっていくことだと考えている。なんとかギクシャクしないような伝え方を身につけたいと切に願っているが、これも行動しないことには磨かれない。

(Q6)「相手が傷つくのではないか」ということが気になりますか。

「とても気になる」(39.0%) 「どちらかと言えば気になる」(48.9%)

「ほとんど気にならない」(3.9%) 「どちらかと言えば気にならない」(8.2%)

圧倒的多数の人が相手のことを考えているとみると、うれしくなる。しかし、これは相手が重要なのではなくて、相手を傷つけたということで自分が傷つきたくないとなると、人間の発達、人間関係の発展と言う点で問題を感じる。こういう言い方をすると、相手はこんなに感じるのか。これもやってみて分かること。「相手が傷つくのではないか」ということを気にして、「だから言わない」のではなく、どう言えば気持ちよく聞いてもらえるか、そこを考えたい。言葉に繊細でありたい。

### 3 不登校学生の居場所

#### (1) 研究室登校

授業から研究室に戻ると、Bさんが一人、頬杖をついて座っている。「いらっしゃい」と言っても、トロンとしたまま何も言わない。「コーヒー飲むけど、どう?」「いい。」そっけない。気にせずコーヒーを飲んでいると、「ここに居るね?」と言言。「どうぞ。」こちらもしらげなく返し、作業を始める。机に伏したり、また頬杖をついたりしながらしばらく居たが、来訪者の姿を見ると、スッといなくなった。何回か来るうちに、授業に出る気はしない、友達に会うのも嫌、下宿でごろごろするのにも飽きた、彼氏にふられた、おもしろくないと、ポツリ、ポツリ語った。ここでも、親への不満が出てきた。

ある時、研究室へ戻るやいなや、彼女の甲高い声が飛んできた。「先生は一、モォー、だめじゃないっ!水、枯れてるよっ!」そうだった。鉢植えの水やりをしていなかった。「ワァー、ホント。危ないとこだったね。ありがとう!」思わず鉢植えに寄って、「よかったね。Bさんが気がついてくれて。ごめんごめん。」いつものように、植物とお話し。「いいよ、先生。私が水やりやってあげる。まかしといて。」

研究室登校は続いた。そのうち、誰か来るといなくなっていたのが、相手が先輩だと一緒にいられるようになった。次に後輩。研究室を尋ねてくる下級生の対応をしっかりとってくれた。同級生が最後になった。それも始めは居るだけで黙ったまま。自分の方から話しかけるまで、時間がかかった。それでも少しづつ授業に出られるようになり、友達の援助も受けられるようになった。ほぼ半

年間の出来事である。

研究室へ顔は出したいが、他の人には会いたくないという人もいる。そういう人は暗くなってから現れる。しかしせっかく来ても、誰かがいると部屋へ入らずに帰ってしまう。時には、メモを残して。すぐに電話をするが、ほとんど留守電。メッセージを入れる。向こうから電話がかかることはまずない。が、次に会った時必ず言ってくれる。「先生、メッセージ聞いた。」かすかだがつながりを感じる。しかし、通常の登校ができるまでにほぼ2年を費やした人もいる。もう少し、ほんのもう少しこまめに関わりたいと思う。

## (2) 大学生の不登校

Bさん以外にも、研究室登校をしてくる人がいる。「休みたいけれど、休めない。」と訴えてくる人もいる。そんな人たちにふれたこともあって、大学生の不登校を卒業論文で取り上げた人もいる。本学の学生400名を対象にした調査(松田, 1994)を、一部紹介したい。

(Q1) 学校に行きたくないと思ったことはありますか。

「ある」(84.0%) 「ない」(16.0%)

(Q2) 「ある」と応えた人。その時自分は精神的に弱いなと思いましたか。

「はい」(62.4%) 「いいえ」(27.8%) 「わからない」(9.8%)

(Q3) その時どのような行動をしましたか。

「登校した(方が多い)」(78.5%) 「休んだ(方が多い)」(21.5%)

(Q4) 登校した人。登校したのはなぜですか。

学校のこと「単位を落とさなかったから。」「授業に出ないと分からなくなるし、友達に迷惑をかけるから。」「せっかくお金を払っているのもったいない。」

自分の気持ち「学校に行かないのは正常でないという、世間の考え方が気になって、休む勇気がなかった。」「なんとなく。」「親の顔が浮かんだから。」「前日と状況が変わっているかもしれないので、学校へ行ってみなければわからない。」

(Q5) 休んだ人。休んでいる間、何をしていましたか。

「寝ていた。」「洗濯をしていた。」「レポートを書いていた。」「自分の好きなことにつかった。」

(Q6) 学校へ行きたくないと思った人。その原因は何ですか。

人間関係のこと「友達とうまくいっていない。」「怖い先生がいるから。」

自分自身のこと「他にしたいことがあったので自分の時間が欲しかった。」「学校に行くことがめんどくさい、たいぎい、しんどい。」「なんとなく。」「大学に慣れていなかった。」

学校のこと「学校が遠いから。」「予習をするのを忘れた。」「授業が疲れる、おもしろくない



い。」

(Q7) 連続して学校を休んだことがありますか。

「ある」(12.5%) 「ない」(87.5%)

(Q8) 休んでいる時に友達に来てほしいと思いますか。

「思うことの方が多い」(33.1%) 「思わないことの方が多い」(38.2%)

「わからない」(28.7%)

(Q9) 休んでいる時に友達に電話をしてほしいと思いますか。

「思う」(58.9%) 「思わない」(21.3%) 「わからない」(19.8%)

(Q10) 休みが必要な時には卒業を延期してでも休みたいと思いますか。

「卒業を延期してもよい」(6.9%) 「卒業を延期しない範囲で休む」(66.9%)

「休まない」(26.2%)

(Q11) 大学をやめたいと思ったことはありますか。

「ある」(34.9%) 「ない」(65.1%)

(Q12) 「ある」と答えた人。その理由は何ですか。

進路のこと「もっと他のことを勉強してみたい。」「大学に入るために必死で勉強してきたけれど、それが本当に自分のやりたかったことか疑問に思う。」「志望校でなかった。」「別の道があるかもしれないと思う。」「就職のことを考えて専門学校に行けばよかったと思ったから。」

まわりの環境のこと「気の合う友達がいなかった。」「環境になじめなかった。」「女子大だから。」「周りの人が自分と比べ学力的に劣っている感じがして、学校のレベルが低いかもと思った。」

(Q13) やめるのを思いとどまったのはなぜですか。

「授業で学校の在り方を学び、いろいろ考えることが多くて講義内容が良いと思った。」

「もうお金を払ったし、この大学にいても、やろうと思えば何でもできると思った。」「今やめたら自分を甘やかすことになる。」「友達の、やめないで、の一言。」

(Q14) 本学で落ちつける場所(心の居場所)がありますか。

「ある」(45.7%) 「ない」(39.3%) 無回答(15.0%)

(Q15) 「ある」人。それはどこですか。

- ・学習ホール(51人)    ・ピアノ室(19人)    ・ゼミ室(18人)    ・図書館(16人)
- ・クラブハウス(14人)
- ・友達がいればどこでも(12人)    ・誰も居ないしんとした場所(7人)

(Q16) 悩みがあるとき相談できるのは誰ですか(複数回答)。

- ① 本学の友達(85.0%)    ② 学外の友達(70.0%)    ③ 親(44.3%)    ④ 彼氏(20.0%)

- ⑤ 大学入学以前の恩師 (4.5%)    ⑥ 大学の教員 (4.3%)    ⑦ きょうだい (3.8%)  
⑧ 学生相談室 (相談センターとは別) (0%)    ⑨ その他 (4.0%)

学校を休むことへの罪悪感、あるいは後ろめたさを感じている学生の姿が浮かび上がってくる。まさにこれまでの教育の成果というべきか。しかし、体も心も、疲れたときには休みが必要。正々堂々休めばいい。自分に元気を生み出すことが、悪いことであるはずがない、と思う。伝えたい。

ところで、この調査をみても、人間関係につまづいて学校に出てこれなくなることがある一方、嫌になって大学をやめようとした時、それを思い留まらせてくれるのも、また友達という人間関係である。仲間との存在、仲間との関係づくりの重要性を改めて思う。日々の暮らしのなかで、それを実践していきたい。

(Q8) (Q9) の結果は、ぜひ学生に伝えたい。友達思いの人であるほど、「のぞいてあげないと」の思いにかられて、まずい結果を生みかねない。訪ねるのも、電話も慎重でありたい。ポストあるいはドアに、メッセージはどうだろう。それにもまして、助けが欲しいときには、気軽にSOSが出せる関係を日頃からつくっておきたい。お互い余計な気遣いをしなくていいように。

(Q14) (Q16) は、淋しく、厳しい結果である。大学に落ち着ける場をもつとまらないでは、その生活が大きく変わるだろう。大学生活を充実させるために、学生の居場所を大切に考えたい。そして、学生が困った時には、少しでも役に立てる教員でありたい。学生との関わりを重ねて力を付けなくてはと思う。

おわりに

「日々、楽しく暮らしたい。」この思いから研究室を開放してみて、その収穫の大きさに驚いている。もちろん、楽しさも元気ももらっている。が、それと共に、訪ねてくれる人たちに、人間を見せてもらっている。人間を教えてもらっている。これは大きな力。つくづくよかったと思う。

大反省を一つ。人が集まる研究室にはまさに日常の暮らしがある。あいさつ、お茶のサービス、一つのテーブルをみんなで使う、掃除等々。気分のいい人もいれば、落ち込んでいる人もいる。授業ではできない学びの材料がごろごろしている。人間関係づくりの訓練の場とも言えるだろう。確かにそうだが、まず学ぶことではなくて、心地よさを味わってもらったはず。それが、すぐに学ばせたがってしまう。学生のおおらかさがその誤りに気付かせてくれた。学生と共に、ぼちぼち歩みたい。

(註) 紹介させていただいた調査は、以下の卒業論文である。

松田祥江 「大学生の登校拒否」 1995年

中山良子 「自己表現力の育成をめざして - 意思表示を中心に -」 1996年